

感謝箱献金だより

## ガリラヤのほとり 32

2019 年度 感謝箱献金 お献げ先



## アルディ ナ ウペポ (東アフリカの子供を救う会)

長年にわたり内戦が続いたウガンダ北部グルで反政府軍の誘拐から逃れるため野宿している子供たちのシェルターを 2004 年に建設。現地 NGO(UYAP)の協力を受け子供たちの心と健康面のケアを始めました。

2007 年に職業訓練所を開設。裁縫教室を生徒 40 名、教師 2 名でスタート。ミシン 25 台を備え裁縫の基礎技術を教え、初等教育として読み書き、計算の授業も行いました。卒業生の中には自宅での仕事やワークショップ、マーケットなどに雇用され収入を得られています。慢性的貧困の中にあって収入を得られることは女性たちの自立につながっています。

ウガンダ聖公会から派遣されアジア学院で研修を受けた C.サムソン氏が指導している「有機農法と農業技術を学ぶプログラム」の支援を 2016 年に開始。2017 年より南スーダンから流入する難民、とくに女性や孤児のために支援を開始。2017 年、職業訓練所内の電気の屋内配線を完成、照明設備も整備。電動ミシンの設置、生徒たちへの給食、長年運営を共にしてきた現地スタッフの待遇改善などの裁縫教室の内容充実を進めています。

## 中部教区「国際子ども学校」

日本に暮らすフィリピン人の子どもたちのための学校です。中部教区名古屋学生青年センターでは、1998 年に「国際子ども学校(ELCC)」を設立以来、名古屋市を中心とした地域に在住するフィリピンからの外国人労働者の子ども達への支援を続けています。

いろいろな事情から地域の学校に通うことが出来ない子どもたちのため、また、地域の学校に上がるために必要な言語や社会性を身につける場所でもあります。毎日を安心して過ごせることによって、自分自身を大切に、将来を考えることができるように手助けし、さらにはアイデンティティーの形成時に必要な母国語の授業、フィリピン人同士の交流にも力を注いでいます。子どもたちとそこご家族の経済的不安や交流の不自由さを少しでも軽くできれば、と献金をお献げし活動を応援しています。



## 「聖地ろうあ子どもの里」(Holy Land institute for the Deaf)

聖公会中東エルサレム教区が 1964 年に設立した、主に聾啞者・盲人の 3~20 歳の人たちのための支援・教育施設で、事務局はヨルダンにあります。2 年前に長く施設長を務めた Br.Andrew が退職され、現在は LuayHaddad 司祭が施設長です。

2011 年のシリア内戦勃発以来、シリアからヨルダンへの難民が急増し、そちらへの支援活動も行っています。そういう状況を知ったコア・スタッフは、現地に赴き、困難な状況を見てきました。そして、感謝箱献金のお献げ先として承認いただき、「HLID 子どもを支える会・日本」(代表;吉松さち子さん)を通して、献金をお献げしています。

HLID は教育施設であり、目の不自由な人が 100 万人と言われる中東地域で、子どもの教育だけではなく、盲教育に携わる教員や職員の人材育成の中核的な役割を担っており、その使命と責任は大きいと言えます。皆様のお祈りと献金をお願いいたします。

## NPO 法人「ワンダウム」

カナダ聖公会の支援により 1932 年長野県小布施に結核療養所「新生療養所」(新生病院の前身)が開所。カナダでの募金活動の際、日曜学校の生徒が[1(ワン)ダウム(10 セント)]銀貨を綺麗に磨いて教会に持ち寄りお献げしたエピソードが伝えられています。そのカナダミッションの先人達の思いを受け継ぎ、海外医療協力事業としてネパール、バングラデシュへの医師派遣、海外からの研修生の受け入れを行っています。また、東日本大震災の被災地の病院にも医師を派遣続けています。また、歴史事業伝承事業として新生病院内に歴史を後世に伝える建物群が保存され、創設以来集められた資料や写真が残されています。これらを活用し、守り継ぎ有形無形の想いを様々な形で地域社会に伝えています。

カナダとの絆をより深め、未来への贈り物とすべく、敷地内にカナダのシンボルツリーでもあるメープルの木を植林しメープルの森を創生する環境・交流事業も行っています。

## サイディア・フラハ

サイディア・フラハはアフリカ・ケニアで、差別や極度の貧困に苦しむ子どもと女性の福祉のために活動する NGO 団体です。親と死別したり養育を放棄された幼児、ハラスメントや虐待に苦しむ女子を、優先的に児童養護施設に保護し養育・教育しています。地域の子どもたちも通える小学校・中学校、洋裁教室などを立ち上げ、

弱い立場に置かれがちな女性の就労を助け自立・自活のお手伝いをしています。現地で活動する日本人スタッフの荒川さんはじめ、東京のサイディア・フラハを支える会のスタッフの皆さんとも連絡をとりながら、活動報告会や縫製作品の販売など、顔の見える支援を続けています。



### 岩手県 難病・疾病団体連絡協議会



難病患者の方々に「支え合える仲間がいるよ」「一人ぼっちではないよ」と電話相談、来室相談、メール相談を開設して19年目になります。

東日本大震災では様々な相談が寄せられ、被災者体験の教訓を語り継ぎ、災害時の一時避難先の整備、被災後の心のケアを行ってきました。

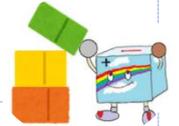
難病患者の方々も積極的に社会参加の機会を持つことを目標に支援してきました。

「あなたは難病です。治療法は未確立で研究途上です。」と告知され途方に暮れ、生きる希望をなくし、仕事もできなくなり、それでも難病と向き合わなければなりません。そのような方々に療養相談、関係機関との連携、交流会支援、就労相談、講演会開催などを通して、地域で普通に明るく過ごせるように支援を続けています。

### 災害被災者・東日本大震災被災者支援(積立)

東日本大震災から8年過ぎた現在も、十分に復興が進んでいるとは言い難く、今後も被災地を憶え祈り支援を続ける事が大切と考えます。また、災害が発生した場合、被災された方々のために祈り、速やかに必要とされる地域への支援ができるように準備を整える必要があります。2018年まで積み立ててきた東日本大震災被災者支援積立金と災害被災者積立金を統合し、幅広く災害被災者支援を行う資金として2019年から3年間30万円を積み立てます。

2018年度の東日本大震災被災者支援積立より、岩手県釜石市で被災者住宅、復興住宅などでコミュニティー作りを支援している「釜石支援センター望」と「いわき放射能市民測定室 たらちね」にお献げしました。また、災害被災者支援積立より西日本豪雨被災者支援として神戸教区婦人会にお献げしました。



### 難民・移住労働者問題キリスト教連絡会

難キ連は日本でただ一つの教派を超えたキリスト教エキュメニカルな、難民や外国人労働者を支援するNGOです。「出入国管理及び難民認定法」という法律制度の中で日本にやってきた難民が難民と認められることが極端に難しい状況から非正規滞在者の状況に置かれ、その大部分は不法滞在者として入管収容施設に収容されます。難キ連の入管被収容者面会支援活動には、感謝箱献金事務局スタッフも面会支援に同行して被収容者のお話を聞き取り、準備された差し入れ品を渡します。収容を解かれた仮放免難民申請者の生活支援は、難民日本語クラス、家庭訪問、医療相談、教育相談、食糧・学用品などの無料送付など多岐に渡ります。2019年度より、難キ連の主な活動はこれまでの入管被収容者面会支援活動の縮小に伴い外国籍の子供たちの学習支援、居場所づくりに移行いたします。引き続き難キ連活動へのご理解とご支援をお願い申し上げます。なお、支援物資につきましては、日本語学習者向けの文房具、ハガキ、便箋等、お願い申し上げます。

送り先 難民・移住労働者問題キリスト教連絡会  
〒169-0051 東京都新宿区西早稲田 2-3-18-24NCC  
気付 電話 03-5826-4915

### ニームの会

南インドの農村に住むダリットの女性たちの自立のための「WOLD」を支援する超教派のグループです。ダリットとは「抑圧され、踏みにじられた人々」を意味する言葉で、カースト制度下の「カースト外」「不可触民」を指します。1950年にインド憲法でカーストによる差別、「不可触民」の禁止が明記されましたが、差別は現在でも厳然と残っています。

「WOLD」は多くの自助グループを作り女性たちに様々なエンパワーメントのトレーニングを行い、貧しいヒンドゥー、ムスリム、キリスト教などカーストを超えた女性たちの組織作りをした結果、この地域に大きな良い変化をもたらしました。また、農村センターでは「子どもと女性」の健康について啓発活動を実施。薬草の重要性を説き、有機栽培、自然食の普及に力を入れています。

現在、インドではヒンドゥー至上主義の政権下にあり、キリスト教徒の大半がダリットで社会活動をするNGOも殆どがキリスト教系であり、特に外国からの援助が届かないように政府の規制がより厳しくなっています。そうした中であって「ニームの会」山下明子代表が今夏、訪印されるので「WOLD」代表に「感謝箱献金」を直接手渡して頂きます。

### 「リグリマ・ジャパン」



「リグリマ」とは、バングラディッシュに住むキリスト教徒の少数民族、ガロの女性達「リグリマ バングラディッシュ」と日本の支援グループ「リグリマ ジャパン」で設立されたガロ語で、団結、結束、協働を意味します。

就学、就労の機会や権利の主張も許されず、蔑視と差別の中、「リグリマ」の活動を続けています。裁縫指導プロジェクトや、医療指導プロジェクトで、小物を作り販売し、僅かな収入を得る喜びや、無知だった病気に対しても命の大切さを知り、人々の為に何が出来るか、自ら考え行動することを実行しています。マイノリティーの中に生きるガロ民族にとって、「リグリマ」は、唯一の絆となっています。



お献げ先から～

## リグリマ ジャパン

## 「バングラデシュ訪問報告」

代表 上澤伸子

いつもリグリマのメンバーのためにご支援をありがとうございます。今年も3月にバングラデシュを訪れ、皆さまの祈りの込められた感謝箱献金を、リグリマの現地ディレクターであるラブリー・ダゼルさんに手渡してきました。

これまで10年間、皆さまからの献金によって、3つのプロジェクトを行ってきました。裁縫トレーニング、改良かまどプロジェクト、池の再生プロジェクトです。3月の訪問時にラブリーさんと話し合ったときに、今まで学んだことをもっと生活に生かすにはどうしたらいいか、裁縫を学んだ人たちが積極的に収入に結びつけるため、あと5年で何ができるかを考えました。そして、今後5年間は、これまでのような技術を伝えるトレーニングから、今もっている技術を生かすための意識向上ワークショップへ転換をはかることになりました。



ガラパラ・グループのポピーさんは家の横に雑貨店を開きました。畑で採れた野菜も売っています。

ラブリーさんは「みんな意識を持っているけど、うまく生かしきれていないと思う。だから、扉をたたいて、みんなのやる気を引き出したい」と言います。あと5年の間に、リグリマの各グループが住む村で、メンバーだけではなく、すべての女性を集めて、この「扉をたたく」ワークショップを開きたいそうです。農業以外の仕事もして生活の底上げをはかること、日頃から協力を深めて、ひとりひとりが自ら考えて行動する力をつけること、そのたいせつさを学んでもらおうというのです。そうしておけば、災害や暴動など、不測の事態に見舞われても、村全体が最底辺の困窮状態に陥らずにすみます。また、コミュニティ内で問題が持ち上がったときにも、リグリマ・メンバーだけではなく、村人全員が一致団結して対処できるでしょう。ラブリーさん

は、村人みんながよりよい生活を送ることを望んでいるのです。

最後に、現地からの手紙の一部を紹介します。

「日本聖公会の皆さんや、日本のリグリマ・メンバー、支援者のかたがたに感謝しています。わたしたちもまた、皆さんのためにお祈りをしています。わたしたちは今年と来年に、いくつかのセミナーを計画しています。とくに意識を高めるセミナーを開催する予定です。どうぞすれば自分の能力を用い、信仰を生かして、家族を養うことができるかを知らせたいと考えています。これによって思いを現実のものにしてほしいのです。イエスさまに従えば、心穏やかに、前に進むことができるでしょう。わたしたちはセミナーの成功を願っています」



NSKKの横断幕の前で、裁縫トレーニングと意識向上ワークショップ(2015年7月)



今年3月にもダッカのガロ・ナングリマ教会を訪れました。ギターに合わせてガロ語の賛美歌を歌っているところです。

## 感謝箱献金のいのり

神さま、今日もみ恵みの中で生かされていることを感謝いたします。

イエスさまはいつも、悲しんでいる人、苦しんでいる人と共に歩まれました。

私たちにもそのイエスさまの歩みに倣(なら)う心をお与えください。

私たちのこの献げものが、最も助けを必要としている人々のために用いられますように。

また、この人々との交わりを通して共に生きるものとならせてください。

主イエス・キリストのみ名によって アーメン

今号は「おとずれ」の中に紙面を頂きました。皆さまが祈りと感謝をもってお献げくださった献金がそれぞれの場で活かされていますこととお憶え頂き、今後とも「感謝箱献金」の働きをご理解、ご支援いただければ幸いです。

日本聖公会婦人会感謝箱献金事務局 〒297-0032 千葉県茂原市東茂原10-192 永井方  
電話/FAX 0475-24-6915 E-mail kansyabako@gmail.com